**ポルトガルとサンディアゴ・デ・コンポステーラの旅**

翌朝よりテージョ川に抱かれた７つの丘の街と呼ばれるポルトガルの首都リスボンを観光、サン・ロケ教会は1500年初頭に黒死病（ペスト）から守るために聖人ロケを祀り創立している。1584年キリシタン大名の名代で天正遣欧使節の4人の少年がここで宿泊している。当時の日本は信長本能寺の変後の時代で彼らは13~14歳だった。ポルトガル・スペイン・イタリアを回り、活版印刷機・西欧楽器・海図等の土産を抱え‘90年に帰国している。中央祭壇には幼いキリストを抱いたマリア像を祀り、周囲には4人の聖人の像がある。内1人は1549年に来日し宣教活動をした聖フランシスコ・ザビエルである。エンリケ航海王子によるポルトガルの全盛期の大航海時代は14世紀後半から16世紀にかけインド航路やブラジル発見等をし、貿易の拡大による巨万の富を得た。その時代にテージョ川沿いにポルトガル独自のマヌエル様式の最高傑作である世界遺産ジェロニモス修道院とベレンの塔を見学した。我々の大半が学生時代の学びで写真や建築物名の記憶があり、懐かしい。建物・大聖堂・回廊，塔を観て、その美しさに感激を受けた。エンリケ航海王子没後500年を期した「発見のモニュメント」も先頭に王子やヴァスコダガマ（インド航路を発見）等30人の人物（学者・探検家・聖人・航海士等）彫刻が両サイドに並び船出するキャンベル船の栄華を象徴している。来日したザビエルは日本人をどの国の人達より優れていると褒め、ビスケット・パン・ボタン・カルタ・コンペイトウ・コップ・天ぷら・シャボン・メリヤス・トタン・タバコ・オルガン・カステラ等のポルトガル語が日本語になり今でも使われていることに親近感が湧いた。３日目はユーラシア大陸最西端のロカ岬に立ち寄り、140ｍの断崖に立ち、荒波の大西洋の美しさ抜群、天気も最高。その後世界遺産シントラの王宮を観光、宮殿の歴史はイスラムの支配から始まるが航海時代の富から王族はマヌエル様式に改造した。16世紀にはイスラム文化も復古し、アズレージョという色彩豊かなタイルを好んで使いだした。その後城壁に囲まれたオビドスに立ち寄り、石畳の街を散策。その後アルコバッサで世界遺産サンタマリア修道院を観光。ポルトガル初代国王アフォンス1世時代、フランスのシトー会の影響を受け、質素を重んじ、ファサード（正面）は18世紀のバロック様式に改築されたが内部はゴシックが残り、大聖堂は20ｍの高い柱が林立し、飾りや装飾は一切なく、静けさの荘厳さがある。祭壇前にアフォンス4世時代の王子ペドロと侍女イネス、白亜の白い石にゴシックの見事な15世紀の傑作彫刻が彫られ、2つの棺が相対的に並んでおり、2人の不倫の愛による悲恋物語が今も語り継がれている。その舞台となったコインブラの元貴族の館のホテルに泊まり、疲れでぐっすり寝た。4日目の朝起きてビックリ、部屋の天井両サイドには女性像と血が付いた皿、別には赤い血が付いた剣の絵が描かれている。早朝、ホテルの大きな庭を歩き10分位でイネスが断首された涙の館や地下から湧く涙の泉跡を見学した。朝食後コインブラ大学を観光、13世紀に創立した世界最古の大学でポルトガル屈指の名門は旧校舎と新校舎に分かれ大学が世界遺産となっている。美しい広場の横に図書館があり30万冊の本を保存し、3階以上のハシゴを使って本を取る部屋の景観は素晴らしいが写真を禁止していた。構内の「帽子の間」は過去の王様の画像を掲示し、今は総長就任や学位授与式に使われている。ミゲル礼拝堂は一面のアズレージョ（タイル）や天井及びパイプオルガンの装飾はじっと見つめたい程の美しさだった。その後アヴェイロに立ち寄り、カラフルな小舟に乗り、心地良く街並みと運河を楽しんだ。5日目はスペインの北西部に位置する世界3大聖地の1つである世界遺産サンティアゴ・デ・コンポステーラを観光、美しい広場にある世界各地からの絶え間ない巡礼者に対する宿泊所や改修中だった大聖堂のファサードは様々な建築様式を取り入れ、独特の重みを感じる。祭壇は聖人ヤコブの像と遺骸が祀られている。巡礼者は長い道のりを超え、証明書をもらい、正午からミサに参加し、終わりにボタフメイロ「お香を炊き、重い香炉を左右に振ることで煙を浴びる儀式」で神の祝福を受ける。観光中、巡礼者に遭遇、勇気を出し、どこから来たかを訪ねたら、パリ（1600ｋｍ）から来たと述べ、手にはタブレットを持ち、笑顔で対応してくれた。握手を求め了解の下で写真を撮らせて頂いた。6日目はツアー会社のパンフレットから参加することを決めた私の憧れの場所、世界遺産ボルトを観光、ところが午前中強い風と雨で川沿いのワイナリーで名産のポートワインを試飲した跡、世界でも有数の美しいサンベント駅を観光したが歩いての観光は無理。当日午後は昼食も含め自由行動でツアー参加の大半の方が観光をやめ、バスでホテルに帰った。私は諦めきれなく、1人で歩き出したら奇跡が起こり、雨が止み、目指すビュウポイントの高台にある修道院のテラスからメトロが走る2重構造のドン・ルイス・1世橋と世界遺産ボルトの旧市街が撮れた。大満足で歩いていたら懐かしい渋い声のべサムムーチョの音楽が流れていた。音楽に釣られ何処からかと探していたらガラス張りのレストランに遭遇、そこでワインを飲みながら美味しいピザを食べていたらイケメンの若い男性職員や常連の女性客２人がチャップリン等のパントマイムをラテン音楽に乗って演じてくれ、歓迎してくれた。私も浮き浮きになった。皆と一緒になって記念写真を頼んだら、素敵な中年女性職員が進んで撮ってくれた。海外旅行で素朴な現地の方々と初めてこんな楽しい交流ができ忘れられない半日の1人旅となった。リスボンの夕食時にディナ—ショウで聞いたファドは初めの経験であるがイタリアのカンツォーネ・フランスのシャンソン・スペインのフラメンコと同様にポルトガルにはファドという芸術がある。夕食にスーパーでサーモンの握り寿司を買いホテルに帰る。オプリガードボルト、オプリガードポルトガル